

③追分碑の元位置

前記追分碑は図-33の「元位置」にあった。分岐における左右両道（官道、作場道）共に道型が今も明瞭である。



図-33

④遠藤家（？）住居跡と墓石／図-34



図-34a

図-34a 白枠内にはかなりの墓石が埋もれているのではないかと推察される。地形的にはここに建物があった雰囲気のある場所である。同図bのとおり、二つの墓石の一部である。ところで、墓石の頭部に大日如来の梵字（ア）が刻されている、湯殿山信仰と何か関係ある気配がする・・・何を意味するのか。



ア

享和三亥正月十九日
義山道圓信士
眞月智名信女

(1803年)



ア

寛政四子三月□日
春光妙貞信女
一閑宗貞信士
明和六丑三月廿二日
春定妙盛信女

(1792年)

(1769年)

(1756年)



地蔵の後ろは倒壊した石塔

一つに三人の戒名

図-34b

実は思い出すに、2014(平成26年)は図-10cのとおり、墓石は倒れていなかった。しかし、横伏状態を見ると、その後、何らかの意図（以後面倒を見ないことにした）を以て倒して現況に至っていると思われる。

上の二つの墓石頭部の梵字が気になったことから、まずは、代表的な二つの宗派とご本尊（主尊）と梵字について簡単に整理する。

『法華経』を拠り所とする伝教大師最澄開祖の天台宗は久遠実成無作の本仏を以て本体としており、結果的に天台宗では特定の本尊を定めていないという。したがって、釈迦如来、阿弥陀如来、大日如来や不動明王、薬師如来など様々であるとされる。

他方で『大日経』を根本経典とする弘法大師空海開祖の真言宗本尊は大日如来である。



図-34c

しかる処に、位牌や墓石頭部に入れる梵字は、天台宗にあっては図-35 のとおりのどちらもあり得るということだが、真言宗にあっては大日如来『ア』を採用するとされる。

梵字の中の『ア』は特別な意味を持ち、「阿」は発音（文言）最初の一文字であることから、全ての根源や本質を表し、不生不滅であるという、すなわち、成仏世界の意味でもある。宗派を超えて大事にされる種子ではあるという。

そこで、図-34b 墓石の梵字「ア」はどのように捉えればよいのか、江戸期に遡れば当域は石行寺を中心とする天台宗圏と見なす中においては、遠藤家の天台宗帰依は当然だろうとする見方がある。他方、真言宗帰依だったかもしれないという見方も出来る、なぜならば、図-36a のとおりに近くの大橋の所に、真言宗帰依に結ぶ湯殿山信仰碑2基（江戸期）建立されている、また、同図b のとおりに天台宗石行寺本堂内歴代住職祭壇には伝教大師像の他に弘法大師像をも祀っている。これらからすれば、天台域に真言宗信仰が混交（浸透）していても何ら差支えはないということになる。果たして真相はどうであったのか。



大日如来
ア
図-35a



阿弥陀如来
キリーク
図-35b



岩波大橋の所
図-36a



石行寺本堂内
図-36b

参考に、図-37a は西川町本道寺から月山に至る「高清水通り」の約 10.4km 先の山中にある墓石2体（湯殿山信奉者）の頭部には図-34b と同様に「大日如来 ア」（図-35a）の梵字を刻している。他方で、同図b は、同通りその先の月山直下近くの「体内岩」にある墓石頭部には『円』を刻している。円は太陽や月を象徴し、あるいは、宇宙の広大や生命の循環を表し、故人の魂が永遠に安らぐことを願う気持ちを表現・形にしたものである。そうすると、「大日如来 ア」の梵字の意味合いと共通することとなる。



図-37a



図-37b

⑤二つの墓石

2024(R6)年12月21日(土)河合卓さんの案内で初めて知った。図-38のとおりで、直方体のものには弁柄(紅殻とも/赤色顔料)が残っていることから逆修供養の意図を込めた墓であろう。なお、この先(南側)の加藤家は戦後、今の所に住まいしたものであり、この墓とは無関係であろう。



図-38a



図-38b



瑞寶全真信士

さて、「④遠藤家住居跡と墓石」と「⑤二つの墓石」とを合わせて、こんな所に墓石がある理由を考察する。直観であるが、竜山信仰、つまりは石行寺に帰依する憎坊とは無関係であろう、「①昔、岩浪の火葬場」とは大いに関係があるのではないのかと思う。伝承されて来た発音「ごさまえ」は「御三昧場の地」と推論したことを踏まえると、その火葬場の管理人とその住まいに係るものではなかったのか。最上義光より始まる歴代山形藩主に仕えて来た武士の遺体処理を担った穢多えたに係るものではなかったのかという説もある。

⑥五輪塔

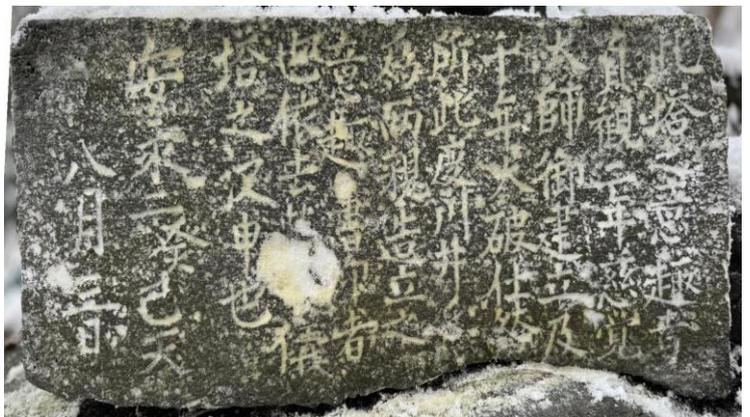
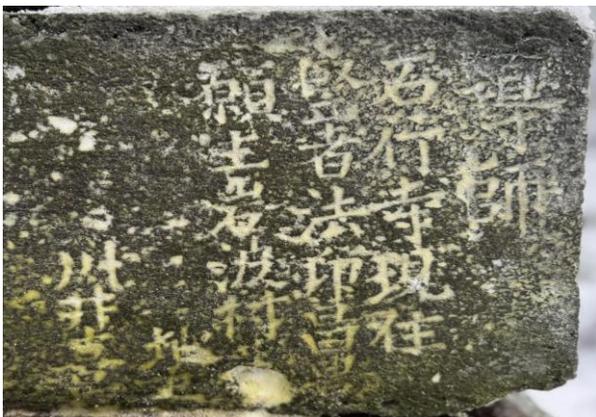
図-39a 写真の右側(東方面)は横根に至る車道の法面であり、除雪された雪塊が押されて本塔に当たったことによる影響だろうか、西側台座の一部は土中に沈み、このように西側に傾斜している。それにして

も、造立から 251 年も（2024—1773）経過しているが、崩れないでよくぞ保持されている。また、一つの石材から細工したであろう一石五輪塔（図—41）も奉納されている。今となってはほとんど人目に付かない杉林の中にひっそりと佇んでいる。



図—39a

台座の南面と西面には図(表)—39b のとおりの碑文刻字があり、図(表)—40 のとおりに活字化を図り解読した。2024(R6)年 12 月 22 日（日）午後幸いにも 15cm ほどの降雪があり、現地に馳せ参じ刻字を全部読むことが出来た。



図—39b

(台座正面)	此塔之意趣者 貞観二年慈覚 大師御建立及 千年大破仕然 所此度川井氏 為兩親造立之 意趣書印者 也依去此□儀 塔之沢由也 安永二癸巳天 八月三日	(台座左面)	導師 石行寺現住 堅者法印昌豊 願主岩浪村 地主 川井喜
図(表)－40			



図－41

簡単に意識する。

その1；(台座正面) この塔の意趣は次のとおりである。往古を辿れば、当地に貞観二(西暦860)年慈覚大師が五輪の塔を建立された、しかし、約1世紀(安永2年・1773－貞観2年・860＝913年差≒1,000年)が経過し大破してしまった。ところが(然所＝然処、しかるところ)、この度、川井(≒河合)氏は、亡き両親に対する供養の心を合せて再建造立すると共に、この意趣のと通りの祭儀を考えた者である。これらの経緯(意趣)に依拠(依去)し――踏まえて、ここを塔之沢と名付ける。安永二年みずのとみ癸巳の年(西暦1773年)八月三日に建立した。

その2；(台座左面) 当時の石行寺住職「**堅者法印昌豊**」が導師となり、関係者が集まり、厳粛かつ盛大に開眼供養(入魂儀式)を執り行った。 ※；2024(R6)年12月21日(土)、石行寺佐藤志亮住職からの聞き取りによると、安永五年11月16日死去した実在の住職であったという。

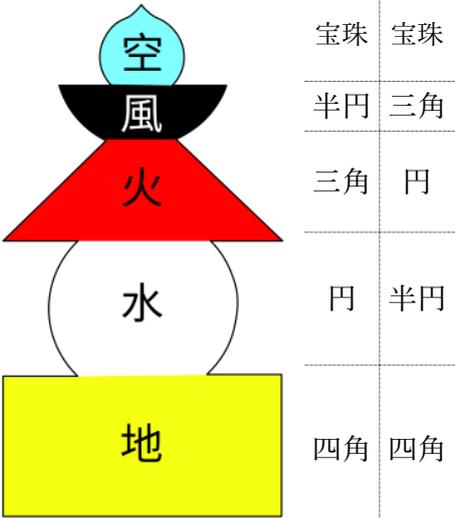
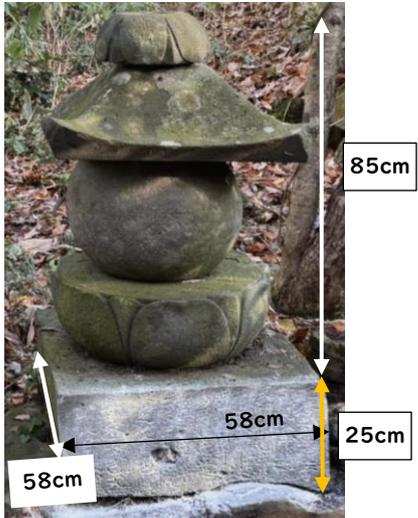
また、願主は岩浪村在住かつ地主の川井喜(き? よしみ?)である。

これだけ大型一台座は58cm四方、全高110cmのものであるから多額の費用を要したことであろうが、川井氏が全額を負担したのだろうか、あるいは、岩浪村他住民の浄財寄進もあったのであろうか。ここは南北長方形の平坦地に造成されており、僧が籠ったと思われる建物(憎坊)があったのではないかと、また、本塔正面に向かうとほぼ北の方角で左手に石行寺が位置する。これほどの大型の五輪塔造立に係った諸事情を想像するに、地域の人々にとっては一生一度の大事業だったのではないかと。

竜山信仰の中核(中心拠点)を成した新福山石行寺は和銅元(708)年春3月17日行基菩薩が開基した。その152年後、貞観二(860)年に慈覚大師が再興(中興)した歴史に鑑みて、まさに、慈覚大師の指示によって、ここに庵あん(いおり)を結んで僧侶が住んだのが始まりではなかったろうか。

ところで、五輪塔の基本について図(表)－43aに整理して見た。『ウィキペディア(Wikipedia)』から拝借したものだが、他の資料・史料にもある一般的な構成である。しかし、同図bここ現地のものは、構成がチグハグになっている。最初からこのような組合せであったろうか、ならばどんな意味を込めたのだら

うか？ いや、崩れたものを再興した時に間違っただのではないかと考えられる。 2024(R6)年 12月 22日(日)再度調査した。もしも倒壊した場合、一番傷が付き易い(欠損し易い)図-44の部位など全体を凝視、点検したが、そのようなものは見当たらない。

(奈良市西大寺奥の院)	一般的構成	ここのもの										
	 <table border="1" data-bbox="855 371 1007 831"> <tr> <td>宝珠</td> <td>宝珠</td> </tr> <tr> <td>半円</td> <td>三角</td> </tr> <tr> <td>三角</td> <td>円</td> </tr> <tr> <td>円</td> <td>半円</td> </tr> <tr> <td>四角</td> <td>四角</td> </tr> </table>	宝珠	宝珠	半円	三角	三角	円	円	半円	四角	四角	
宝珠	宝珠											
半円	三角											
三角	円											
円	半円											
四角	四角											
図-42	図(表)-43a	図(表)-43b										



⑦おこもり堂 (おこもり様)

図-45のとおりで、慈覚大師が籠ったとされる伝説の地、内部には同大師かと思われる石像が祀られている。以前はもっと大きな建物であり、傍に大木の松1本があったという。



矢印先は石行寺

図-45

⑧供養塔

図-20 のとおりで、横根の河合卓家建立—哲夫氏は卓さんの父—のものである。ここらは横根地区でも日当たりが良く平坦地を形成しており、昔、何戸かの集落があったと直覚していたことから、昔の人の労苦に感謝を込めて本塔を父親と共に建立したという。



昭和五十三年



河合哲夫
之建

図-46

⑨三界万霊塔

図-47 のとおりで、今となってはどなたが、いつ頃、何の目的で建立したかは不明となったが「三界万霊塔」と刻されている。前記、⑧供養塔とは 50m 弱の間隔である。河合卓さん想定集落跡地と見れば当時の人が、三界—『無色界・色界・欲界』、あるいは、『仏界・衆生界・己界』に潜む人や獣などあらゆる生あるものの霊を供養するために建立したものだろう。

すると、前記、河合さんの見立て“この一帯に何戸かの集落があったのではないか”と言うことと、さらに、東北の眼下には下記「枇杷田坊」跡があったこと、さらには、寺院の境内などに設置される場合が多いということもあり、この地は石行寺に係る憎坊跡とも考えられる。



図-47

⑩枇^び杷^わ田坊

図-48 のとおりで、「瀧山の歴史」に登場し、竜山信仰に係る「枇杷田坊」の跡であって、湿地（池）近くに五輪塔の一部が残っていたが、一時持ち上がった建物建設との関係で埋め立ててしまったという。



図-48

⑪山神碑

図-49 のとおりで、河合卓さんがいう横根^{した}下の屋敷の山神碑である。ここには以前、杉の大木があつて、藤つるが絡まっていたという、しかし、幾度かの落雷によりついには枯渴してしまつたとされる。



図-49

第四章 横断的共通性視点からの切り口

個々の存在位置は散在するが、共通性の切り口で取り上げる。

1. 実利（本音）と精神性（建て前）

図-50 のとおりに天神様が祀られている。そして、石行寺境内には多くの門下生を抱え短歌・俳句・詩吟等の指導に当たった伊藤清左衛門先生顕彰碑がある。これらからは、子供達の勉学はもとより大人達の学問追及姿勢を応援する意味合いではなかったのか。例えば、隣接する上桜田集落内の「(上桜田) 月山神社」や太子殿（舟越作兵衛家個人所有）内部には、沢山の方の俳句が掲示されており、岩波地区も含めて、この当りも文芸活動が盛んだったのではないか。そういうことから、本域は生涯学習意欲を鼓舞する情熱が溢れていたことだろう。



図-51 のとおりの弁財天と宇賀神に共通するのは、財・富を齎すことの願いであろう。



前者、天神様信仰は精神性、精神文化を育まんとする向上心を読み取れる、他方で、後者、弁財天等からは現実的な財、すなわち、実利を求めんとする現実性を読み取れる。どちらも大事、両方相まっの世の中という処だろう。

2. この界隈の湯殿山碑

湯殿山碑は至る所に存置し珍しくはないが、私の居住する滝山地区の中でも岩波地区（岩波集落／図-52ab と横根集落）の湯殿山碑4基に着目する。I部およびII部に記述したものに加えて図-53のとおり横根集落内の「ここ」にあるものを加える。今は民家の間を上がった所であり分かり難い、昔はここを旧道が通っていたという。碑文刻字は図-54のとおりである。梵字と湯殿山の刻字以外は、風化著しく解読が困難になりつつある。

岩波大橋	岩波寺下
	
図-52a	図-52b

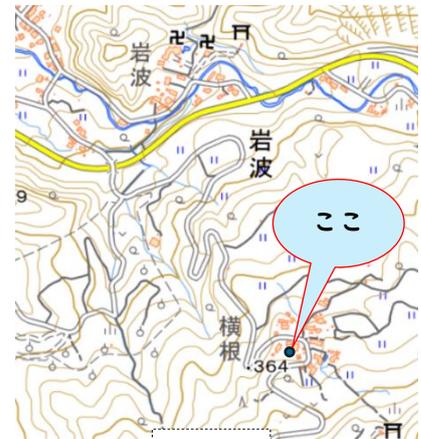


図-53

横根集落内（昔はこの前を道が通っていた）			
北面			
幅 96cm × 高 134cm × 奥行 40cm			頭部に刻した梵字は大日如来（胎藏界）のアーノク
左下	左上	正面	右
河合清吉 山川□□ 伊東□□ その他にも複数の刻字は見えるが、風化で読めない。	 八 月 八 日		 寶 (1 7 5 2) 曆 二 壬 申 天
図-54			

それら4基について、図(表)－55のとおりに一覧にした

所在地	岩波大橋		岩波寺下	横根集落
図示	図－3a左	図－3a右	図－3b	図－5
建立年 (和暦、西暦、月日)	安永八年(己亥)	慶応元年(乙丑)	寶暦十年(庚辰)	寶暦二年(壬申)
	1779年	1865年	1760年	1752年
	八月八日	八月八日	七月吉祥日	八月八日
歴史の重み(2025基準)	246年前	160年前	265年前	273年前
古い順	3	4	2	1

図(表)－55

これらから、岩波地域に存在する4基の特徴は次の3点である。

- ✔ 1；2基は寶暦年代に建立されたもので、山形市内では古い部類に入ること。
- ✔ 2；3基は八月八日建立であること。
- ✔ 3；1基は湯殿山開山の丑年御縁年建立であること。

次に前記の4基はどのような位置付けなのか、関連要素を列挙する。

その1；岩波の地理的条件(位置)である。山形市内地域区分は図(表)－56のとおりで、都心地域は東西南北中央の5区、その以外として20区に分けている中での一つ滝山地区内(町内会は30団体)にある。瀧山麓のエリアであり、昔は瀧山信仰の中心的場所であった。

	No	地区	基数
	1	八森	2
	2	土坂	3
	3	神尾	1
	4	岩波	4
	5	小立	1
	6	上桜田	3
	7	中桜田	1
	8	平清水	4
	9	元木	3
	10	東青田	1
	11	青田	1
	12	南原町	1
	計	25	

図(表)－56a

図(表)－56b

その2；湯殿山と西川町旧本道寺の開山(開基)は図－57のとおりである。

- ・空海は、大同四己丑(西暦809)年四月八日、湯殿山を開山(開基)した、丑年が肝である。
- ・そして、同年八月八日、「月光山光明院」(本尊は大日如来)と名付けて本道寺を開山した。

・天長三丙午（826）年、湯殿山大権現を勧請して「月光山本道寺」に改号した。

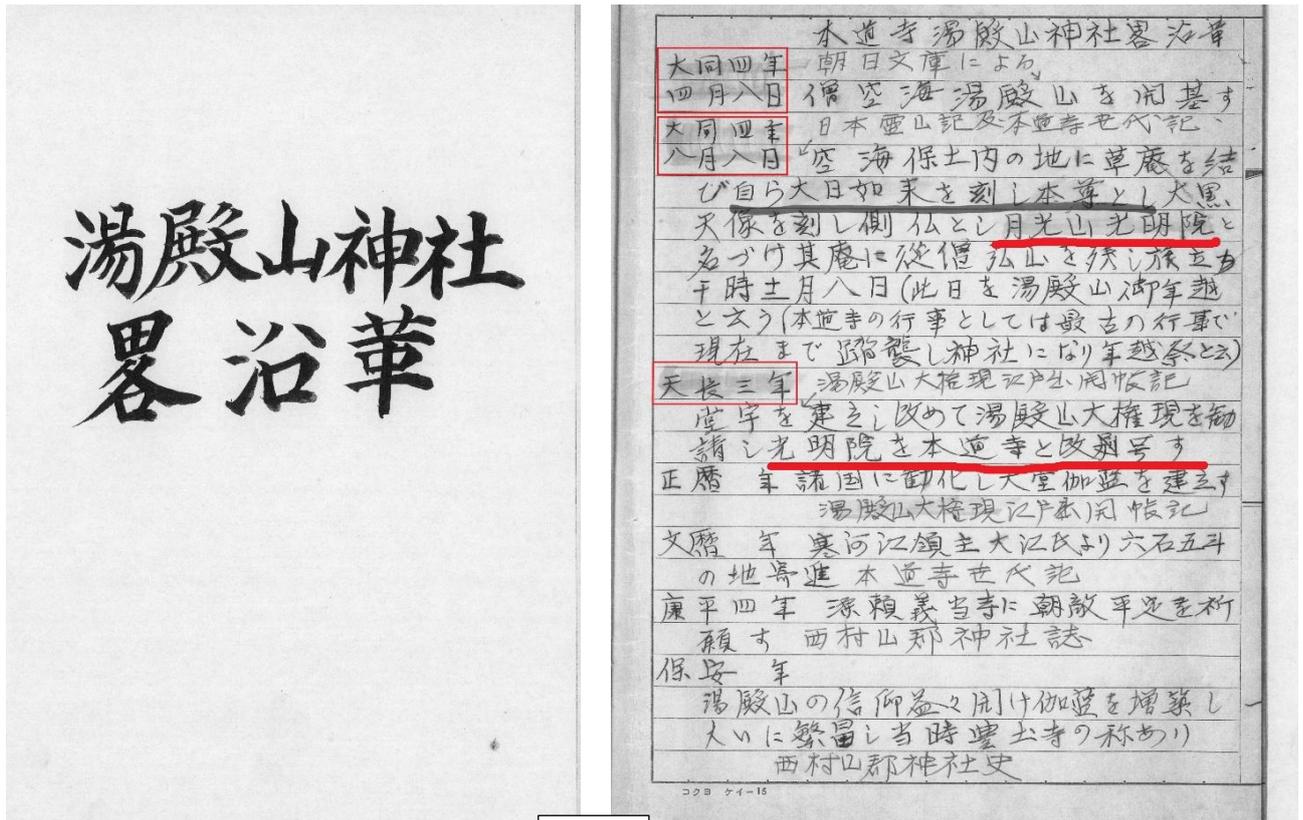


図-57

その3；丸山茂著「神都 岩根澤之面影」（同刊行舎・昭和十五年十二月二十日発行）に興味ある部分があるので取り上げる。「・・・丑年は湯殿山の縁年と言って弘法大師が湯殿山を開いたという伝説に基づき、参詣者は例年の10倍にも達した。・・・慶応元丑年は湯殿山の縁年であったから、岩根澤口を通して参詣した信者も夥しい数で、百人講、または二三百人講という団体も数多かった。・・・」 他の学識者の研究によれば、丑年は岩根澤口のみならず、出羽三山八方七口に参詣者が押し寄せたという。

その4；村山民俗学会員の市村幸夫さんから借用の山形市内「湯殿山」単独碑データから分析すると図(表)-58のとおり。市内に存置する八月八日建立碑は46基、全体の13.9%を占める。岩波地域の4基中、3基は八月八日建立であり、その割合は75%である、密度が高い。なお、滝山地区に湯殿山碑は同データベースによると24基（全体比7.3%）となっているが、図(表)-7bにおいては25基となっており、差異は今後確認する。 直接的関係はないが、山形市の人口は2020年国勢調査によると24万7,590人であり、滝山地区人口は約24千人であるから約10%である。

全基数	332基	100%
建立月日 四月八日	68基	20.5%
建立月日 八月八日	46基	13.9%
最古のもの	山形市本沢長谷堂内町 長谷堂観音堂雷神東 [正面] 奉供養湯殿山卅三度成就所 元禄十丁丑天六月廿信仰碑（1697年）	
図(表)-58		

その5；図-59aは新福山石行寺の歴代住職を祀る祭壇の一部であり、頭に最澄の諡号「傳教」を掲額し、中央中段の「仏前鏡」頭部には同図bの梵字『ア』を冠し、向かって右下部には同cのとおり弘法大師像を祀っている。竜山信仰の中核（中心拠点）を成した新福山石行寺は、和銅元（708）年春3月17日行基菩薩が開基したとされ、当初は法相宗、まもなく天台宗に改宗し今日に至る歴史を持つ。

	石行寺本堂内		岩波寺下
天台宗	主に真言宗 ?????	真言宗	法華宗(日蓮宗等)
			
図-592a	図-59b	図-59c	図-60

同図b梵字『ア』は特別な意味を持ち、「阿」は発音（文言）最初の一文字であることから、全ての根源や本質を表し、不生不滅の意味をも持つとされる、すなわち、成仏世界を意味する。宗派を超えて大事にされる種子ではあるというが、大日如来（胎藏界）に当てられていることからとりわけ真言宗で大事にされている、そして、その真言宗開祖の空海こと弘法大師像と隣り合わせに安置せしめている。天台・真言の佛々混淆の世界観を今に伝えている。当該4基は、このような歴史的背景を持つ広域内において、地域固有事情が絡んで当該お膝元に建立されたのであろう。

なお、他方で岩波寺下には図-60のとおり「名無法蓮華経」の石碑が奉納安置されている。

[まとめ]

<その1；湯殿山碑>

さて、前記その1～その5関連要素の素材を以って、この4基の存在をどのように考察するのか、如何様な評価・価値付けを図るのか、様々な問題意識が湧いてくるが、この書面の読み手からは、様々な自由な想像についてはお任せすることにし、私の所見は簡単に以下のとおりである。

図-5・6のとおり横根集落内に建立した当地最古の宝暦二年（1752年）頃はすでに石行寺宗派は天台宗であり、すなわち、竜山信仰は天台宗帰依を基盤に隆盛して来た歴史に鑑みて、いわば、天台領域に湯殿山信仰（真言宗）が往古より根付いて来た、民衆に深く浸透して来たと言える。

そして、建立月日「八月八日」に注目する。四月八日は湯殿山開山日であるというのは、様々な書籍本に記載されるように知る人ぞ知る縁日であるが、西川町本道寺「旧本道寺」（現口之宮湯殿山神社）開基は「八月八日」というのは地元の人にさえあまり知られていない縁日なのである。すると、この地において「八月八日」を刻した石碑は、もちろん湯殿山参拝を果たしたであろうが、旧暦八月八日に「旧本道寺」を参拝しつつ、本道寺宿坊に宿泊し、格別のお世話を賜ったことに感謝を込めたもの、それらを証拠

付ける記念碑（講中碑）であろうと想像している。

これらの信仰碑は、湯殿山大権現神霊の生き写しと（神の靈魂を勧請）することからは、地元石行寺の住職が導師を務め、開眼供養入魂儀式を盛大に挙行了たであろうと想像している。その後はこれらの碑は湯殿山と同格の神威仏光を放つ有りがたき湯殿山神社と観念（想念）するものとなり、通り掛かる人みんなが合掌して来たことだろう。

<その2；全般>

『石行寺ミステリー・ランド』（岩波界限）は竜山信仰と修験道道場の融合域であったことから、昔から様々な神々と諸仏が混交した神仏習合のトルネード信仰圏であった。本域はこれが成熟社会とも称される今日の私達の認識の中に吸い込まれて来るのである。シンクレティズム（諸教混交思想）を是とする私は真に嬉しく思う。

別切り口からは多様性の観点である。私は定年退職翌年の2010(H22)年から後期高齢者初年の2024(R6)年まで、全国の歴史街道ならびに四国徒歩へんろのスルーハイイク遊学紀行（15年間・512日間・15,546km）を敢行して来た上で、神職（神社関係者）や僧職（寺院関係者）と多岐に亘り懇談して来たが、現代においては役割が違うということとして、特に前者は神道（神社）空間に仏教の匂いが入ることを、残っていることを忌避しているように写って来た、その空気感は私の意には沿わないと思っている。私は今に残る神仏習合は、今様の多様性社会のあるべき姿を象徴する道標^{みちしるべ}として捉えている。異なる立場を相互尊重した上での対等互啓（恵）精神を声高に強調するものである、その一つとしての神仏習合に対する向き合いである。江戸期までの神仏習合の時代にあっても、一方が他方に吸収されて消滅した訳ではなく、むしろ、立場の違いを相互是認の上で、相手の役割を最大限尊重し、同じ時空を共にして諸々の祭儀を担って来たという歴史の重みを温故知新・不易流行の基軸の周りに巻き付けて行きたいと念ずるものである。そう視点から岩波地区・石行寺界限の石碑から学び取ろうという姿勢を持ちたい。

(end)

[参 考 資 料]

- 《 歴史&宗教 No011 》 吾が地元の最澄と空海
《 歴史&宗教 No012 》 石造文化財から学ぶこと